

バシェの音響彫刻の可能性を探る その3

著者	岡田 加津子, 川崎 義博
雑誌名	ハルモニア
号	49
ページ	75-83
発行年	2019-03-23
URL	http://id.nii.ac.jp/1290/00000243/



報告

バシェの音響彫刻の可能性を探る ―その3―

岡田 加津子／川崎 義博

A research on the potential of the BASCHET Sound Sculpture -part 3-

OKADA, Kazuko / KAWASAKI, Yoshihiro

[目次]

1. 東京藝術大学における音響彫刻修復プロジェクト（執筆：川崎義博）
 - 1) 勝原フォーン修復プロジェクトの始まりとクラウドファンディング
 - 2) 勝原フォーン修復及び問題点
 - 3) バシェ音響彫刻シンポジウム・コンサートの開催
 - 4) 今後の展開及び課題
2. 京都市立芸術大学におけるテーマ演習「新・音響彫刻プロジェクト」2017年度の活動（執筆：岡田加津子）
 - 1) 新しい音響彫刻“Sound go Round”の制作
 - 2) 「音×身体×彫刻@ALTI」プレ公演

― はじめに ―

2015年秋にバシェの音響彫刻2基が本学で修復されて2年が経ち、2017年秋から2018年春にかけて、音響彫刻をめぐる活動は予想をはるかに越えて急展開した。本稿は、その半年間に実現されたプロジェクトを記録し、一般に広く告知することによって、今後の音響彫刻における研究と創造活動が活気を持ち、さらに道の開ける方法を世に問うものである。

報告はまず、1970年の大阪万博のためにフランソワ・バシェが作った17基の音響彫刻のうち、6基目の音響彫刻が東京藝術大学で修復・復元されたことについて、次に、本学オリジナルの音響彫刻が制作された経過とお披露目公演への道のりを述べる。

東京藝術大学における音響彫刻修復プロジェクトについては、このプロジェクトの実質的な責任者である川崎義博氏に執筆を依頼した。本学で音響彫刻2基が修復された時は「アート・イン・レジデンス」という京都市の芸術助成金を使って行われたが、東京藝術大学ではクラウド・ファンディングを用いて行われたこともあり、そういった寄附金を募るシステムを知る機会にもなればよいと考えている。

1. 東京藝術大学における音響彫刻修復プロジェクト（執筆：川崎義博）

1) 勝原フォン修復プロジェクトの始まりとクラウドファンディング

東京藝大におけるバシェ音響彫刻修復は、2015年の東京国立近代美術館でのシンポジウム・コンサートに始まります。ここにおいては、あくまでも協力という立場で関わっていました。しかし、シンポジウム終了後、万博側からの提案により、京都芸大、バルセロナ大学との共同研究として取り組むことになり、更に関わりを持つことになりました。それ以来、バシェ音響彫刻の資料・情報アーカイブを主体に行ってきました。ところが、2016年9月万博からの要請で、部材が破棄されることを避けるべく、残りの部材を保管することになり、10月に独自に藝大取手校地へ運び保管しました。そして、2017年に学科を超えて話し合いが行われ、音響彫刻修復プロジェクトが始まりました。しかし、資金がないので、この年の4月に始まった東京藝大のクラウドファンディングに応募。見事目標額に達し、7月にプロジェクトは具体化していきました。先端芸術表現学科と金工、鋳金、ガラス、木工などを束ねるファクトリー・ラボがメインになり、保存修復の研究室の協力も得て、学科を超えて修復作業が開始されました。以下が修復にあたっての主な計画項目です。

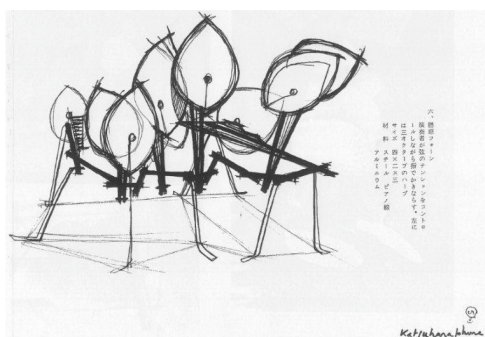
素材調査、構造調査（設計図制作）、不足部材の制作、組み立て作業、調整調律作業、記録。そしてクラウドファンディングのリターンとしてのワークショップ、シンポジウム、コンサート、新作の作成などです。これは、単に修復するだけでなく、記録を残し、後世レプリカの作成に役立てる事、また修復がなった音響彫刻をどう役立てていくか？を考えた結果です。実は、クラウドファンディングは初めての試みであり、資金集めと、この修復プロジェクトを多くの人に知っていただくには最適の方法だったのですが、リターンの制作にかなり力を注がざるを得ず、かなり負担となり、今後の課題となりました。

2) 勝原フォン修復及び問題点

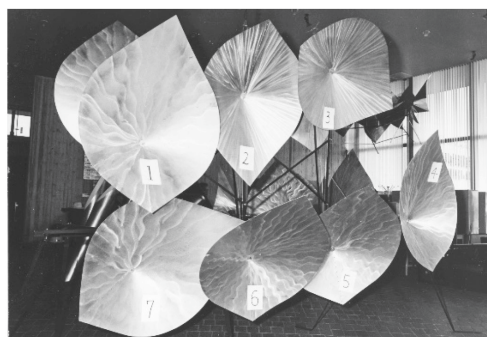
先に修復がなった、池田フォン、川上フォン、高木フォン、桂フォン、渡辺フォンに比べて今回修復する勝原フォンは、不明な点が多く、残された部材は足りないものがあり、修復が難しい作品でした。メインのフレームが残っているので、なんとか修復なるであろうと考えて取りかかりましたが、実際始めてみると、不明な点の鍵を解く資料もなく、論議が尽きませんでした。実は資料にあった当時の共同制作者アラン・ビルミノ氏の言葉は以下のようなものでした。

「勝原フォンは、恐らく一番難しい作品。デッサンも写真も、確実な方法で、この作品の構築を再現させる手助けにならない。ハープ自体は単純で、4本足も簡単。しかし、すべての部分を総合することは不可能に思われる。下に組み立て中の写真がある。結局ホールの入りの天井に吊り下げた」つまり、修復は不可能と先に宣告されていたわけです。

残された資料としては、音響彫刻のデッサンと当時の写真数枚でした。その写真も多くの



デッサン



当時の写真

フォーンでフレーム（骨格）が隠されており、その為メインの弦の部分の取り付け部分の構造が全くわからない状態でした。また、足も写真に写っている部分は理解できたのですが、半分は写ってない状態でこれもどのようにするか？論議的になりました。

国立劇場で古代楽器を修復された木戸先生の言葉「跡、痕跡をよく見なさい」との言葉に従い、フレームに残された痕跡をかなり調査し、組み立てを試行錯誤していました。問題としては、勝原フォーンは当時床に設置される事なく、天井からの吊り下げ状態での展示でした。勝原フォーンはかなり大きなものなので、その吊り下げ用に器具が取り付けられ、その痕跡もあったので、より複雑なことになっていたのです。修復を手伝うバルセロナ大学のマルティ・ルイツ氏ともかなりの意見交換をし、推測を交えた修復をせざるを得なかったのです。また、メインの弦部分は弦の数が多く、そのチューニングにおいては、正確な記録記述がなく、記録映像や音声記録など参考になるべくものはありませんでした。つまり、楽器についての調律の問題が大きく残ったのです。結果構造上のできる調律をマルティ・ルイツ氏に任せることになりました。多くの弦を含め、使用不可能な部品は記録を取り保管、新しいものを取り付けました。しかし、フレームなどの錆に関しては、先の木戸先生の言葉に従い、そのままの状態にしました。そして、金工の講師の努力もあり12月初旬、修復が完成しました。以下が修復上の主な問題点です。

- ・完全な資料がないので、果たして完成形かどうかは確かめようがない。
- ・メインの弦の部分の調律が正解かどうかは確かめようがない。
- ・フォーンは、同じ形状でも何種類もあり、取り付け具合を見て決めているが、それで良いのか、確かめようがない。

つまり、先の残された言葉をを超えて修復がなったのですが、完全だとは言えないのです。

逆に言えば、この修復において、完全はないのです。

3) バシェ音響彫刻シンポジウム・コンサートの開催

クラウドファンディングのリターンとして、また修復の成果発表として、12月16、17日と東京藝大上野校地においてシンポジウム・コンサートが行われました。それに先立ち、12月初旬の取手校地の学内展において、修復場所の金工ファクトリー内でのコンサートがあり、その後上野校地での資料を含む、本体の展示がありました。これらの展示やコンサートには多くの人が訪れ関心の高さを示しました。

上野校地でのコンサートの出演は、東京藝大学生の新曲演奏だけでなく、違うタイプの演奏者を選んでみました。京都芸大より岡田加津子+北村千絵のVoiceを含む演奏。バシェ協会会長のパーカショニスト永田砂知子及び修復に携わったバルセロナ大学のマルティ・ルイツの息のあった演奏。そして世界的サウンドアーティスト鈴木昭男の独特なアプローチによる演奏—それぞれの組が全く違ったアプローチで音を奏で、この勝原フォーンの可能性を示しました。

シンポジウムにおいては、京都芸大岡田准教授のフランス・バシェ協会のアトリエ紹介に始まり、マルティ・ルイツ氏によりバルセロナ大学でのバシェ音響彫刻の研究取り組み事例の発表。横浜国立大学大学院の中川准教授による、バシェ音響彫刻の現代音楽、サウンドアートにおける流れ、位置づけなど多彩な発表がありました。



コンサート

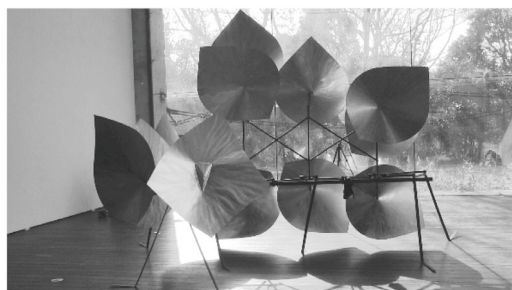
4) 今後の展開及び課題

勝原フォーンの修復により、その後も様々な動きが生じて来ました。たとえば音響彫刻の原理を利用した、組み立てが簡単なミニ音響彫刻学習キットが生まれたことです。最初はリターンのワークショップの為のものでしたが、参加した人はこのキットを使い、音響彫刻の原理を学ぶとともに、その組み立て、調律、アレンジを2時間程のワークショップで体験できました。このことは、後に高校生の為の夏休みの作品制作体験で生かされました。また、森ビルの工房テックショップでのレクチャーワークショップでの音響彫刻体験にも生かされました。初心者であれ、その原理を学べ、音を体験できる。自分なりのアレンジが楽しめる。このような可能性を示した音響彫刻キットの誕生です。バシェが書き残してい



ミニ音響彫刻学習キット

た、新しい楽器への三要素。1 形態、2 音響、3 大衆の参加。これらの要素は、現在にも生かされる、そう確信したワークショップでありました。また、藝大上野校地での展示の後、美術館での展示の話も舞い込み、美術館を通じて新たな人たちに勝原フォーンに触れてもらう機会を積極的に提供していきたいと思っています。「誰でもが参加でき、新しい音を体験できる」バシエの音響彫刻がもたらしたこの体験はまだまだ、展開できそうだと考えています。



勝原フォーン 全景

2. 京都市立芸術大学におけるテーマ演習「新・音響彫刻プロジェクト」2017 年度の活動 (執筆：岡田加津子)

1) 新しい音響彫刻 “Sound go Round” の制作

6 月後半から、テーマ演習ではいよいよオリジナルの音響彫刻制作に乗り出すことになった。まずは、どんなコンセプトを持って制作に臨むのか？我々が新しい音響彫刻を作るにあたっては、アルティ・ダンス・カンパニーとの共演、つまり身体や動きとの関りを軸に、コンセプトを考える必要があった。アンリ・マティスの絵のように人々が手を取り合って踊っている感じ…。まわる、めぐる、旋回する—2つの回転するものが違う音列を持っていて、その組み合わせがずれていったら…スティーヴ・ライヒの音楽のように！それなら雄株と雌株を作る？では、男の音列と女の音列の違いは？美術学部生がスケッチブックにイメージ画を描き、音楽学部生が音列を提案した。そして、バシエの音響彫刻に触れるうちに学んだこと、たとえば、発音体と、そこから振動を伝える部分、そしてそれを拡声する部分の連関性などを念頭に置き、7月から本学彫刻棟で試作品の製作にとりかかった。しかし、どうすれば音の高さや響きの質が安定するのか、規則性がなかなか見出さず、時間ばかりが経過した。前期最終回には、「ピアノスタル」という音響彫刻の制作をめざすフランス人青年アントワーン・マルボス（ピアノ・バシエ・クリスタルを発明したピエール・マルボス氏の子息）が来日し、テーマ演習の試作品を見てくれたが、問題の解決には至らなかった。



試作品の製作

後期が始まり、彫刻棟ではオリジナル音響彫刻の土台が少しずつ作られていった。しかし、ある地点に来て、どうしても作業が進まなくなった。一方方向に音列が鳴るだけでなく、逆行もできるように、という注文に応えることが困難を極めたからだだった。学生たちも一生懸命知

恵を寄せ合って、外枠が回りながら音棒を打つ仕組みを考えたが、どうしてもうまくいかなかった。松井教授が工学畑の専門家と電気技術師を本学に招き、状況を説明してアドバイスを請うた結果、電気回路を用いたセンサーを使って、音棒を打つハンマーを作動させるしか方法はない、とのことであった。

1月に入って、美術学部生はみな、2月の全学作品展のための制作に追われる身となった。学生たちの考案した音響彫刻を実現させるべく、松井教授の孤軍奮闘する日々が続いた。

2月5日朝、我らのオリジナル音響彫刻“Sound go Round”2基が、京都府民ホール ALTI へ搬入された。“Merry-go-round”（回転木馬）をもじって名付けられたこの“Sound go Round”は、外枠を回すことによって、ハンマーが金属棒を打ち、上部の拡声盤から教会の鐘のような響きが宙に放たれる。1基ごとの鳴り方と、2基の音列が噛み合った時の音響が異なることに魅力があった。また、その回し手がダンサーであるならば、音響彫刻はただの回転遊具ではなく、そこに「音×彫刻×身体」の融合体としての音空間が立ち現れることを、私たちは期待した。3月2日に行なわれた「音×彫刻×身体@ALTI」プレ公演については、次章で詳しく述べることにする。

なお、“Sound go Round”の制作にあたっては、電気回路部分を設計・製作していただいた佐治他三郎氏とプラネット電子の大槻一雅氏に感謝申し上げると共に、制作費を支援していただいた「のれん百人衆」に、この場を借りて深く御礼申し上げたい。



新しい音響彫刻の制作風景



Sound go Round をアルティへ搬入する



組み立てられた Sound go Round

2) 「音×身体×彫刻@ALTI」プレ公演

2018年度に創立30周年記念を迎える京都府民ホールALTIと本学との連携共同制作公演として、2019年3月に本公演を開催するにあたり、その1年前の2018年3月にプレ公演を打つことをアルティ側から提案された。そこで、2017年度のテーマ演習開講中に新しい音響彫刻を完成させようという気運が高まり、また、今度は即興コラボレーションではなく、振付をして稽古もしてきちんと練り上げた舞台を見せたい、というダンス側からの意見も出てきた。こうしたことを踏まえた結果、本学にあるバシエの音響彫刻、桂フォンと渡辺フォンそれぞれ

それをフィーチャーした舞台音楽を1曲ずつ本学から提供し、その音楽を元にアルティ・ダンス・カンパニーに振付けてもらう。そして、もう1作、新しく作られた本学オリジナル音響彫刻 Sound go Round 2 基を使ったパフォーマンスを、同ダンス・カンパニーに創作してもらう。こうして、主だった3つの作品を中心に、プレ公演を組み立てることになった。

【プログラム】

2. 『クジラにのまれた男』～渡辺フォーンとダンスのために～ (初演)

作曲：岡田加津子

振付：河邊こずえ、山口陽子

ダンス：奥田明香、田中裕子、宮澤由紀子、三好美希子、森 元穂、黒川岳（本学学生）

演奏：松井駿、山田春佳、丹治樹（以上3名本学学生）、岡田加津子

ナレーター：大井卓也（本学卒業生）、北村千絵（本学非常勤講師）



(チラシデザイン：宗接花菜)

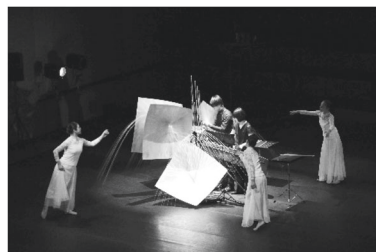


2. 『閉ざされたジャクリース』～桂フォーンとダンスのために～ (初演)

作曲：伊藤慶佑（本学卒業生）

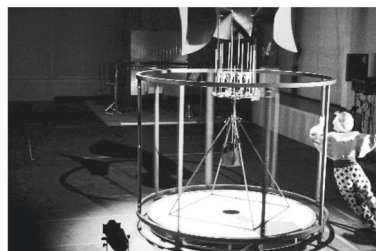
振付／ダンス：河邊こずえ、山口陽子、吉田ルリ子

演奏：伊藤慶佑、谷口かな（本学学生）



3. 『Sound go Round』～サウンド・ゴー・ラウンドとダンスのための～ (初演)

振付／ダンス：三好美希子、森 元穂



プログラム終演後、観客席に呼び掛けて、お客様に自由に音響彫刻に触れていただく時間を設けた。多くの人々が音響彫刻に触っては、その不思議な音に歓声を上げたり、耳を傾けたり

している様子は、これまで何度も見てきた光景ではあるが、私にとってはやはり一番嬉しい時間だった。

ALTIの1階席は、後方5列のみを残し、あとは演じる床とした。1階席からは臨場感あふれるパフォーマンスとして、また2階席からは可動式の床と会場全体を広く見渡せ、奥行きを感じられる舞台作品として捉えられたと思う。満席の来場者の元、無事公演を果せたことに感謝したい。

10日後にALTIで行なわれた反省会では、それぞれの立場からの様々な思いが噴出し、考えさせられることが多かった。これらのことは、次年度のテーマ演習の進行の仕方、本公演の内容とスケジュールの組み方などへ反映させていくべき反省点であったと共に、異なる感じ方、考え方、経験、嗜好、趣味を持つ複数の人々が、一つの大舞台を形作っていく難しさを浮き彫りにした。しかし、それを困難だと承知した上で、それぞれが妥協するのではなく、お互いがお互いの可能性を新たに引き出し合いながら、本公演に向けて進んで行けることを望んでいる。

— おわりに —

本文での記述は割愛したが、アンスティチュ・フランセ関西との協同事業として、音響彫刻クリスタル・バシエの第一人者ミシェル・ドゥヌーヴ氏を、2017年10月京都・東京に招聘し、本学では学生向けの特別講座を、東京藝大では一般向け公開ワークショップを実現できたことは、バシエの音響彫刻の魅力が日本で広く知らしめるためにも大きなできごとであった。

また2018年6月、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA主催「im pulse ～脈動する映像」という企画の中で、フランス人映像作家Vincent Moon氏とバシエの音響彫刻を用いたコラボレーションに参加した。これは、かねてから映像と音響彫刻を合わせてみたい、という希望が思わぬ形で実現されたもので、自分にとっても、またバシエ音響彫刻界にとっても、喜ばしいニュースとなった。

2020年には大阪府が、EXPO'70の遺産である「太陽の塔」や鉄鋼館内の「スペースシアター」を復元・



ミシェル・ドゥヌーヴ氏による特別講座
(10月5日京都市立芸大)



ヴィンセント・ムーン氏の映像とのコラボレーション
(6月15日京都市立芸大)

公開する方向で動いているという。当時、鉄鋼館1階フロアーに所狭しと並べられたバシエの音響彫刻も、広く人々に知ってもらう大きなチャンスとなるだろう。バシエの音響彫刻の可能性を探る旅は、今ようやく始まったばかりなのだ…本稿を執筆しながら、私はあらためて気の引き締まる思いであった。

《共同執筆者プロフィール》

川崎義博 アーティスト／サウンドデザイナー

日本のフィールドレコーダーの草分け的存在。1990年衛星放送 St.GIGA の開局と同時にプロデューサーとして、世界各地をフィールドレコーディング。番組制作多数。CD「知床」「バリ島」「トリニダードトバゴ」DVD「屋久島」など14作品。又、リアルタイムの環境音の伝送も手がけ、'97年世界で初めてのリアルタイムで世界の音が聞こえるサイト「SoundExplorer」を手がけ、後「SoundBum」「AQUA-scape」「Forest Note」などのサイトに関わる。インスタレーションは、'91年東京パーンを始めとし、日本武道館など様々な場所で展開。日本科学未来館、東京都写真美術館、金沢21世紀美術館での世界の音の作品がある。日本科学未来館のプラネタリウム MEGASTAR の番組「新しい眺め」「星野道夫／アラスカの星の下で」「偶然の惑星」「夜はやさしい」などの音を制作。東京藝術大学先端芸術表現科で音の表現を教え、バシエ音響彫刻の修復に携わる。

(作曲専攻教授)

